

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

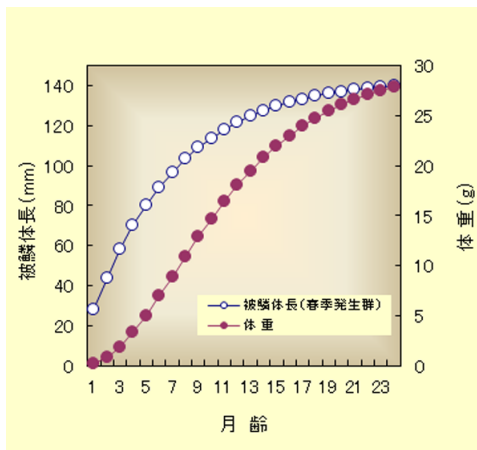
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 厳冬期を除く周年にわたり産卵する
索餌期・索餌場: 分布域のほぼ全域
食性: カイアシ類を中心とした動物プランクトン
仔稚魚期は動物プランクトンやマアジ・マサバなどの魚類、未成魚・
捕食者: 成魚期は魚類の他に、クジラやイルカなどの海産ほ乳類や海鳥類など

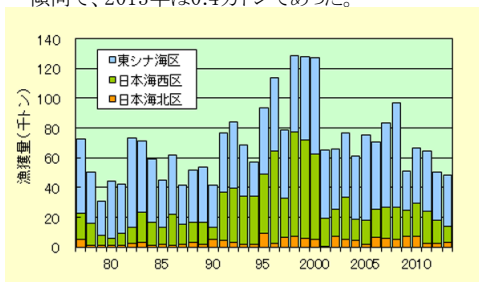


漁業の特徴

本資源は、日本海北区(石川県～新潟県)では主に定置網により漁獲され、日本海西区(山口県～福井県)では主に大中型まき網・中型まき網・定置網などにより漁獲されている。東シナ海区(福岡県から鹿児島県)では、主に中型まき網により漁獲される。なお、シラスは熊本県や鹿児島県の沿岸域で主に漁獲されている。

漁獲の動向

1996～2000年にはシラスを含めずに10万トン超の漁獲があったが、2004年に6.1万トンまで減少した。2005年から2008年まで再び増加したが、2009年以降は減少傾向にあり、2013年は4.8万トンであった。シラスの漁獲量は、2000年には1万トンを超えたが、その後急減した。2005年前後には再び1万トン近い漁獲があったが、2008年以降は減少傾向で、2013年は0.4万トンであった。



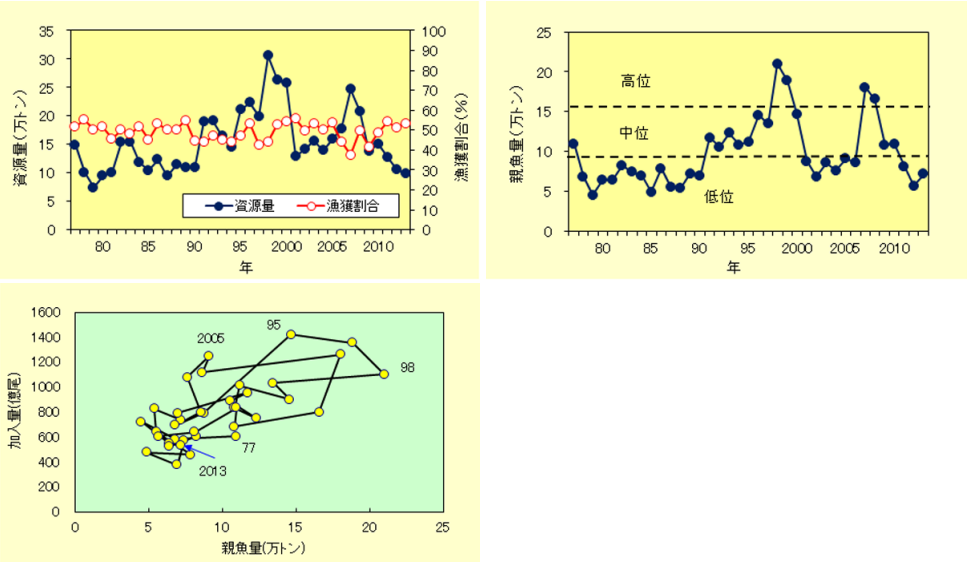
資源評価法

年別年齢別漁獲尾数に基づくコホート解析により、資源量を推定した。産卵調査、計量魚探調査および新規加入量調査(ニューストーンネット)などの結果を参考とした。

資源状態

コホート解析から推定される資源量は、1990年代まで徐々に増加した。1998年には30.6万トンに達したが、2001年には13.0万トンまで減少した。その後、2007年まで増加傾向を示したが、2008年以降は減少傾向にある。2013年は9.9万トンで、1987年以降の低水準であった。また2013年の親魚量は7.2万トンであり、再生産関係から求められるBlimit(親魚量9.1万トン)を下回っている。そのため、資源水準は低位で、動向は減少と判断した。





管理方策

再生産関係から、再生産成功率(RPS)と加入量の上位10%の交点をBlimit (親魚量9.1万トン)とした。現状の親魚量(7.2万トン)はBlimitを下回っている。そのため、将来のRPSが過去10年間の中央値と仮定した時、5年後に親魚量がBlimitに回復するF (Frec)を管理基準値とした。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	37千トン	Frec	1.78	50%
ABCtarget	34千トン	0.8Frec	1.42	46%

- Fは各年齢の平均
- シラスの漁獲量を含む
- Frecは5年でBlimitへ回復させるF

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源量は1990年代後半以降に変動を繰り返していたが、近年では2007年に高い値を示した後、減少傾向にあり、2013年の資源量は1987年以来の低水準であった
- 資源水準は低位で、動向は減少

管理方策のまとめ

- 親魚量がBlimitを下回っているため、Fを適切に削減することで、資源を回復させる必要がある。5年でBlimitに回復させるF (Frec)を基準値とした
- 資源を安定して利用するためには、親魚量の確保が有効であり、加入が少ないと判断された場合には、0歳魚を獲り控えるなどが効果的